

2014年度立命館大学校友会 東日本大震災復興支援事業 東北応援ツアー
レポート 岩手県コース（2014年10月4日～5日）

糸田川 廣志（1972年卒業：理工学部土木工学科）立命館大学技術士会

東日本大震災から3年半が経過した中、東北応援ツアー岩手県コースに参加した。3年半経過して今年は力強さを感じた2日間であった。

語り部の方が、幾度も幾度も語り続けた「地震と津波」に対する自助避難とその継承である。“地震が来たら次は津波だから、早く自己判断で安全な場所へ避難する”との思いを語り続けており、強く心に残った。

長男は新家族を大震災で石巻において2人亡くした。震災直後から阪神震災の経験を活かして支援してきたが、津波や震災の事を1年半程は話すことがなかった。2年ほど経過して少しずつ話しができるようになったのは長男夫婦に子供ができたからと思っている。義妹は名取閉上において被災し助かったが、PTSDを当時は心配した。今は仕事に戻り元気である。

語り部の方々の強い意志を感じた2日間の言葉は、精神的にも前進しているんだなあと感じた。阪神震災とは違い、津波で生命・財産を一瞬にして失った現実には計り知れないダメージであるが、その教訓を糧とし前進する意思を強く感じた2日間に、支援参加に納得できた。

一方遠野の後方支援ボランティアセンターは、点を線にする国の企画が必要と感じた。三陸道の必要性もあるが、やはり後方支援に三陸道の裏側に高規格の国道が必要と改めて感じた。土木技術者の救援道路(生活道路兼用)への志向が必要と再認識した。南海地震を目前にする故郷徳島で、大声で言わねば！

釜石の防潮堤は破損したが、津波到達を6分遅らせ津波エネルギーを8mに減退させた事を聞いたが、大丈夫との思いを作った事もあり多くの人命を救えなかったのも事実である。それが、自助で避難せよとの語りにつながっているのだと感じた。

陸前高田市では、山を崩してその土砂を利用して被災地を盛土する事業が始まっているが、10年後に見事な街づくりが出来ていることを願うのみである。

地元中学生徒が地震直後、近くの山に避難した経緯を聞いたが、後ろは見るなどの先生の注意も糧とすべき言葉である。

岩手県応援は、地域の復興への力強い意志を感じた2日間であった。来年も3月11日には、自分の居るその場所で黙祷合掌して忘れない！